

公民館“報”

“いくつもの山河を越えて来た” 鎌田さん作詞・作曲



東町・鎌田きよしさん「あけのうたう会」のリーダー

明野校区公民館にオルガンを持ち込み、高齢者を対象に、毎月、楽しいうたう会を主宰されている鎌田さんが、また、新しい歌を発表されました。

コロナ禍のため、5か月間、公民館での練習ができず、会員はまだかまだかと首を長くして待っていますが、合唱関係の使用はしばらく先になります。

そこで、鎌田さんは、個人が自宅で歌えるようにと、自ら「夕映えの道」～ささやかなしあわせのうた～を作詞作曲されました・・・皆さん歌いましょう！

新しい日常「オンライン講演会」

公民館も初めて参加！



7月25日、大分学研究会の「オンラインシンポジウム」が開催された。公民館もおそろおそろ初めて「オンライン・・・？」に参加した。通常の講演会では後方の席で居眠もできるが、オンラインでは個人の顔が映り、参加者全員が見ているのでその余裕はない。生真面目に2時間30分、姿勢を正して聴講する羽目になった。

パネラーには、大分市長、佐伯市長、竹田市長、国東市長の4名が登壇され、ウイズコロナ、アフタコロナと新しい経済社会活動の在り方など、それぞれ地域に根差した独自の考えを披瀝された。

皆さんもご参加を・・・！



《都市マスタープラン》(素案)

明野地区構想の説明会

10年ぶりに見直す「大分市都市マスタープラン」の地区別構想の説明会があった。やはり先日発表された明野地区の人口が2040年までに3～4割り減少するという「人口ビジョン」が基底になっている。これで明野のマスタープランが描けるかはなはだ疑問である。

そして、まちづくり目標の「文化機能の充実」や「生活文化拠点の形成」のイメージは？ また、その字句は10年前と同一だが、10年間の人々の生活様式や価値観、社会の変化をどう認識するのか。

さらに、ポストコロナ構想をいかに描くのか、いくつか大きな課題が懸念される。

スペイン風邪について (県史より抜粋)

1918年(大正7年)に流行った「スペイン風邪」について、「大分県史」の近代篇(Ⅲ) 第3章「社会問題と社会運動」の項に、次のように記録されている。

「第1次大戦中の大正7年ヨーロッパの一角から起こり世界にまん延した通称「スペイン風邪」は、感染力が強く死亡率も高いため、国民を恐怖の淵に投げ込んだ。

大正7年秋、全県域を襲ったインフルエンザは、まさに「凄惨そのもの」であった。新妻県知事は10月31日、県下の市町村長に感冒予防の論告を発したが、その内容は、およそつぎのようなものである」

「近時流行シツツアル悪性感冒ハ伝播最モ迅速ニシテ、而モ其ノ病勢漸次熾烈ヲ加エ益々猖獗ヲ極ム。殊ニ学校・工場・会社其ノ他ノ団体ニ於イテ惨禍ヲ蒙ル甚シキモノアリ。斯ノ如キハ保健衛生上寔ニ憂慮ニ堪エズ。此際各自ハ左記事項ヲ遵守シ、予防警戒ヲ怠ルベカラズ。右、論告ス。

- 1 鼻腔咽喉ヲ損セザル様注意シ、常ニ呼吸器ヲ用ウルコト。
- 2 多人数ノ集会ヲ避クルコト。
- 3 悪寒、発熱、頭痛等アルトキハ、速カニ医師ノ診断ヲ受ケルコト。
- 4 患者ハ成ルベク別室ニ隔離ノ上、静養セシムコト。
- 5 患者ノ唾痰、食器、寝具等ハ病毒伝播ノ根源ナルヲ以テ、其ノ場所並ニ一般ノ予防ニ付イテハ医師ニ協議ノ上実行スルコト」

(以下、省略)

「この「怪病、世界風邪」は、今や県全域と全県民を「席捲せずんば止まらざるの勢」で隆盛を極めた。県では、芝居・活動写真をはじめ集会・祭典・興行等を厳禁する・・・略・・・この時、一般人の罹患者数は実に88,505人にも達し、この他に学校関係では、休校措置を採るもの220校(全県下の約6割)、児童・生徒34,110人が倒れ、このうち660人が死亡している。

こうして県下は、各地で大混乱に陥る。当時、まだ、700人と少なかった県下の医師は、激務でほとんど倒れた」・・・略